
それは、舞い上がる桜のように

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それは、舞い上がる桜のように

【Zマーク】

N6499B

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

国立病院の庭には、ある言い伝えが残る桜の木があつた。その病院で九条母父は、不思議な出来事と遭遇する。

(前書き)

病氣ネタです。苦手な方は、遠慮願います。

風が春の色を乗せて静かに吹き荒れていた。

まるでダンスでもしているかのように、花びらたちは螺旋を描きながらじゃれ合つようにして舞い、遊び疲れるとゆっくりと地に落ちる。

それを永久に繰り返すのではないか、と思うほど同じ光景を飽きるほど見ていた。

この桜の木には言い伝えのようなものがあった。

桜が満開の花を咲かせたとき、それは命の開花と呼ばれて万病を癒してしまうという言い伝えだ。この桜がここ、国立病院の中庭にあるのもその言い伝えのせいである。

そこに九条晶子はいた。

彼女がこの病院にいるのにはわけがあった。娘の桜が悪性腫瘍があると判断され、入院中であった。

まだ出生したばかりの新生児だというのに、何故こんな試練がいきなり訪れなければならないのかと、天高くから見下ろしてくる神様とやらを何度呪おうとしたことか分からぬ。

出産した直後の溢れんばかりの喜びは、寸劇と消え去ってしまった。

晶子は桜の木に手を置いて、願うように強く目を瞑る。

こんなことをしたって無駄なのは分かつていた。言い伝えが迷信であることや、それが迷信で無いにしろこの桜が舞う風景を見れば一目瞭然、既に散り行く時期なのだ。しかも、既に木々の色は桜色から枝の茶色へと完全に変化しつつあった。

それにこんな無機質な白の空間だ。叶う願いも叶わなくなりそうで嫌気が差してくる。

晶子は木から手を離し、そのまま背をかけるよにして体育座りをする。

芝生がすこしきすぐつたかつたため、手を挟むように置いて座りなおす。やはり風も強く、桜が舞う方向と同じ方に黒く艶やかな長髪が靡いていた。

それを払う気力すら出ない。

細く流れる髪が、頬と心を痛めた。

花弁が、枝から身を離した。

今、こづしている間に娘は集中治療室にいる。

悪性腫瘍は発症し始めたらその完治は期待できず、人として最年限生活できる時間を延ばすという行為が続けられていたが、ついに山場を向かえ、緊急手術が現在行われている。

それにも関わらず、この場所は静かに風を吹かせて時の流れと共に桜をなびかせている。

桜の木が全ての花を散らせた時、娘の命も恐らく・・・。

晶子は頭を搔き龜る。頭に降りていた花弁が再び風に乗る。

そんなもの、認めたくは無かった。

生まれて間もない娘の顔をまだ覚えきっていないくらいの時間しか過ごしていなかったのに。なのに、命の限りは刻々と迫っている。

娘の桜は、胎児の頃にここに連れてくると胎盤を蹴つて喜んでいたことが多々あった。本当に喜んでいたかの確信は無いが、母親としての勘という奴であろう。

夫もそれに気付いて、良く見舞いに来るときはこの桜の木の下で他愛の無い会話をしていたものだと感傷に浸つてみる。

その頃はまだ、桜の花は開花しておらずこの光景を娘に見せることは叶わなかつた。

走馬灯は、数秒しか流れない。

花弁が、空で踊るように回る。

「晶子！！」

ふいに、誰かに呼ばれる。

耳の奥に鈍く響くような、男性の声。振り向かなくともそれが誰なのは分かつた。だから、あえて俯いたまま膝を抱え込む。

男性は傍まで来ると、ゆっくりと影を作るような位置に座つて、晶子の頭を自分の胸に預けさせた。それは晶子自身を慰める行為でもあり、また自分の心を落ち着かせるための甘えでもあった。

「あなた・・・」

顔は埋めたまま、自分の愛する人物の代名詞を小声でつぶやく。夫の康晴^{やすはる}が勤務を抜け出して駆けつけたのだ。

それは涙声では無かつたが、康晴にしてみれば酷く弱弱しく感じて、一層彼女を強く抱きしめる。

その二人をさらに包み込むようにして、桜の木が揺れた。

花弁が、滑るように風と共に駆ける。

晶子の中に、その夫の行動が引き金となつたのか抑えきれない感情が一気に渦を巻き始める。

怒りか・・・。

悲しみか・・・。

後悔か・・・。

苦しみか・・・。

それは突如頬に感じた熱い感触によつて、耐え切れないものとなつてしまつた。

「あ・・・あなた・・・、桜、が、桜が・・・」

表情が崩れていくのが自分でもわかつた。頬の筋肉がどうしようもなく引きつって、言う事を聞かなくなつた。

伏せていた顔を上げ、初めて康晴の顔を見る。何故、泣き顔になつてから顔を合わせてしまつたのだろうと後悔したが康晴の

表情も自分と何ら変わらないことに、少し安心感を得た。

だが逆にその安心感が最後の堤防を崩してしまった。

声も無く、ただ康晴に抱きついてうわ言のよつて実の娘の名前を叫ぶ。

彼女の乱れる髪を撫でながらも、彼も感ずいていた。

娘の命がもはや秒単位で迫ってきていることを。男だから、だなんて馬鹿なプライドは既に無く、彼も冷めようの無い瞳の熱さに手を頭を覆うようにして置いていた。

いくら大丈夫だと自己暗示しても、現実は無情にも思考を支配する。

それが、悪魔の囁きなのか神様のお告げのかは分からない。

だから憎むべき相手も分からず、ただやり場のない感情を溜め込んでいった。

風は、彼の涙を冷やすために身を振るわせた。

花弁が、芝生に音も立てずに、誰にも気付かれずに身を降ろした。

「九条様、担当医の方からお話が・・・」

いつのまに来たのか、薄い桃色がかかった白衣を着た看護婦が一人の前に立っていた。その表情は今にも泣きだしそうで、彼女の患者に対する優しさが滲み出ていた。

その後ろに、依然として固い表情を浮かべる担当医の姿。

康晴は、出産祝いに新着したばかりのスーツの袖で涙をぬぐい、晶子を抱きながら立ち上がる。晶子の足元は泣きつかれたのか、担当ふり付いており焦点もゆらゆらと明後日の方向を向いていた。

看護士が肩を貸そうとするが、康晴はそれを丁重にお断りして残された家族を支える。

担当医が一步前に出て、康晴と真正面から向き合つ形になる。その眼差しは真剣たるものそのもので、身体に嫌でも力が入った。

大きく息を吸い込むその口の動きが、酷くスローペースに見えて早く、早くというように急かす自分の中の自分と、結果を恐れる臆病な自分が無意味に葛藤し始める。

思考がぐるぐると回る。

妻がすすり泣く声。

看護士が赤い目で傍から見守る姿。

担当医が何故か頭を下げる。

そして・・・。

唇が、言葉を紡いだ。

「

」

え？

ふと、そんな見つとも無い声が康晴の中から発せられた。

聞こえなかつた。いや、確かに担当医は言つただろう。その証拠に、妻が隣で突如泣き崩れ、それを自分ではなく、看護士が支える。康晴は、自分が現実から遙か遠いところに今いるような気がした。これが自閉の空間内だといふのならば、そうであらう。

だが、時間差があつて担当医の発した言葉が自分で反芻されていく。

そうだ。確かに目の前の白い人はこう言つた。

「」臨終です

「」臨終です。

「」臨終です・・・。

「」リンジコウデス・・・。

まだ数えるほどしかこの腕の中に抱いたことが無い娘の命が、終わつた？

まだ撫でてあげることも出来ないくらいしか髪の毛が生えてない娘の命が、終わつた？

まだ自分の名前すら言葉にしたことがない娘の命が、終わつた？

あの咲き誇る桜のような笑顔が、もう、無い。

がつくり膝を落とす。身体にかかる重力が今までに無いくらい重く感じた。

晶子が泣き叫ぶ。今で無かつたらうるさいくらいに泣き叫ぶ。

手を顔に被せるが、すぐに掌に涙が満ちて零れ落ちる。

晶子が少し湿っぽくなつた手を顔から離して、夫の元へと這おつとした、その時だった。

桜吹雪が、地から天に昇るように、舞つた。

濡れた手に、それが張り付く。涙を染み込ませて桜の色が変わる。晶子は舞い上がる桜吹雪を顔を上げて追つていった。ぼやけた視界が、今だけ不思議なほどクリアになつていた。

そして、その視界に[写]つたものに晶子は目を見開いた。涙はもう出ない。

ただ、たつた一つの感情だけがそこに存在していた。

「あなた、見て。・・・桜が」

晶子の言葉に康晴は現実に引き戻される。意外にも言葉に震えが無かつたことに驚きながら、妻のほうに目をやる。

彼女は、空を見ていた。それも、釘付けになつたようにただ一点だけを。

康晴も涙で濡れた顔を上げ、同じ風景を焼き付ける。

刹那、彼の思考は晶子と同調しただらう。

そこにあつた風景は、地から舞い上がつた桜の花弁たちがちょうど樹木の周りを意思を持つてゐるかのように舞つていた。

枝と枝の間に既に散つた桜の花が滑り込み、段々と形を成していく。一度は散つた木が再び色づく。

二人は見た。

風と戯れるそれは、今芽から顔を出したばかりの、咲き誇る桜のようだった。

しばらく一人の前でその姿を自慢するかのように見せていた桜のしばらく一人の前でその姿を自慢するかのように見せていた桜の

花は、ゆっくりとまた見えない風に乗つて舞い上がりしていく。

それは見えなくなるまで上がつていき、一度と降りてくることはなかつた。

晶子が見えなくなるまで見送つた後、愛する康晴の方を笑顔で見て、いつ言った。

桜が最後に、笑顔を見てくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6499b/>

それは、舞い上がる桜のように

2010年10月8日15時10分発行